

(第一部)

『かすみ』の葬儀が終わった。ペット葬業者に自宅まで来てもらい、箱に色とりどりの花を、かすみの周りに敷き詰め、それを業者が運転してきたトラックの後部にある焼却炉へと運んだ。頭がぼーっとして気分は沈みきりで、体が鉛の様に重い。

十四歳だった。ロシア原産のサイベリアンという種で、長毛で背中が青み掛かった灰色でお腹が白く、体格ががっしりした猫だった。新婚間もない頃、妻がペットショップで見つけてきて、どうしても欲しいと言っていたので、猫を飼ったことのない私は、渋々ショップまで付いて行った。

猫なんて飼えるのか？私の不安の大半は、ガラスケースに入った猫を見た途端吹き飛ばされた。まだ、生後四か月だというのに、体毛がフワフワに全身を覆っており、その中でアーモンド形と卵型の中間の小さいがくつきりとした瞳が、私を見つめていた。そして口を開けて「ミャー」と小さく鳴いた。それは、私に飼ってくれと、おねだりしている様であった。横にいた妻が「ね、可愛いでしょう？」と肘で私をつつく。

「抱っこしてみますか？」

店員の勧めで、ショップ内のテーブルに腰を掛けて待つ事にした。人生で、猫を抱っこするのも初めてだと気付いた。

店員が猫を連れて来たので、恐るゝ膝の上に載せてもらい、猫を落とさぬように両手で覆った。猫は、最初はびくびくしながら。私の膝や両手の匂いを丁寧に嗅いでいたが。落ち着くと私の胸の方によじ登って、私を見上げる格好となった。少し涙を含んだ青色の瞳で見つめながら、ひと声「ミャーオ」と鳴いた。私の心はこれで決まったが、不安が全て解消されたわけではなかった。店員にあれこれ聞く。

「私、猫アレルギーがあるかもしれません」

「この子は、アレルギーの起きにくい品種ですよ。抗原というアレルギーを引き起こすたんぱく質が少ないので」

「家を留守にしても大丈夫ですか？私、工場に勤めていて、泊まりの時もあるし、その時妻が実家に帰る事もあるんですよ」

「猫ちゃんは、お水とご飯があれば一泊くらい大丈夫ですよ」

「ご飯は、何を作れば？」

「ご飯は、あちらのコーナーに置いてありますので、猫ちゃんの好みに合わせて選んであげてください。トイレは自分で砂の上にするので、砂を定期的に交換してあげてください。砂もあちらです」

「大丈夫だから。私、猫飼った事あるし」と妻が口を挟み、私の決意は固まり、食器やトイレなど一式を揃えて。猫を連れて帰った。

名前は女の子ということもあり、『かすみ』にした。深く考えたわけではなく、私が偶々テレビで見た、アイドルグループのセンターにいた娘から貰ったものだった。妻はもつと猫らしい名前を主張したが、私は音の響きがこの子に合っている気がして、譲らなかった。

かすみは臆病で、家に来ても部屋の隅にじっと座って私を見つめていた。購入したペットフードに口をつけなかったので、心配になった私は豆乳アイスをかすみの口に近づけてみた。猫が食べても大丈夫な物だ。はじめ、アイスの匂いを嗅いだ後、ペロペロと舐めたので、安心した。その後は、スプーンに載せたアイスでかすみを誘導して、家の中を探索させた。「この世界は安全だよ」という私からのメッセージを受け取った後のかすみは、やがて家の中で活発に動き回るようになっていた。

猫は気まぐれで、人にあまり懐かないと思っていた。ところが、この動くぬいぐるみは、私や妻の後をいつもついて回っていた。私がトイレに入ると、ドアの下から前足を差し出して様子を伺い、妻が風呂に入ると、脱衣所に座り込み、淋しそうな声で「ウミヤオー」と鳴き続けた。

私達夫婦には、なかなか子供ができなかった。その分、家具を齧り爪を研ぐいたずらっ子だが、甘えん坊で人懐こい『毛玉の天使』を大事によく二人で誓った。そう誓った筈なのに。どこで間違ってしまったのだろうか？

結婚して十年程経った頃、食品会社の本社工場から埼玉の工場へと工場長として出向になった。宅食という、各家庭に配達する為の弁当を作る小さな工場だった。二十四時間稼働する生産体制で、日勤の時間帯と夜勤の時間帯に、工場を管理する人間が必ず必要だという事で、私と、元から工場にいる次長が交代で工場に泊まるようになった。

工場にいる時間は途方もなく長かったが、それでも家に帰れば、必ずかすみをブラッシ

ングし、おやつを食べさせ、ボールで遊んでやった。この頃のかすみは、昔と違ってあまり走り回らなくなり、高い場所へのジャンプの回数も減っていた。老年期に入ったようだが、ボールには相変わらず喜んで飛びついていた。

私が職場に泊まる日が増えるにつれ、妻の機嫌は段々と悪くなっていた。

「浮気でもしているの？」

問い詰められ、タイムカードの写しを見せて。やっと納得してもらった。月に一度、工場にやってくる産業医（職場の健康管理を行う医師）からは「時間外と休日出勤を合わせると月百七十時間を超えていますね。メンタルを崩すので、工場への泊まりは減らしてください」と警告された。

これには工場を管理する責任者を増やして対応するしかなかった。そこで、生産管理部長にもお願いして。夜間の泊まり勤務の一部を担当してもらうことにした。漸く、私の時間外勤務が百時間を切るようになった。だが、不規則な生活が続いた所為か、私は眠れなくなっていた。どんなに疲れて家に帰っても、布団を敷くと次の日の生産計画や安全管理について考えこんでしまい、まんじりともせず横になって何時間も過した。そんな夜に、かすみが布団の中までやって来て、私の体臭をクンクンと嗅ぎ。寄り添ってくれたのが唯一の救いだっただ。

眠れない日々を過ごしながらも。毎日の生産目標をクリアし続け、工場長としての役目もなんとか果たしていると思えるようになった頃であった。夜勤を終えて帰ろうとすると、事務室で次長に呼び止められた。

「森須工場長、すみません。今本社からメールが来ております。うちの工場、M&Aで他社に買われたらしいですよ」

「本当？」と聞きながら、自分のデスクのパソコンを開きメールを開く。電話で本社にも確認を取り、その上で次長に告げた。

「どうやら、うちは大阪フィッシュデリー社に買収されたらしいね。この工場だけ、今までの親会社から切り離されて、フィッシュデリー傘下の工場として生まれ変わるらしい」

「私達はどうなりますか？」次長が不安そうに聞く

「具体的な交渉はこれからだそうだが、雇用と待遇は今まで通り保障されるらしい」

この話は私にも、別の不安の種があった。

「ただ、これまでのような宅食ではなく、魚介類の加工品を取り扱う事になるようだ。コンビニ向けの蛸の燻製やサバの味噌煮のパックらしい。生産設備を大幅に変える事は確実

だそうだ」

「資金面ですか？」

「いや、そこは新しい親会社が出すだろう。それよりも、設備入れて、マニュアル作成して、従業員教育をやり直さなければ。それとフィッシュデリーは衛生管理に厳しいという噂だから、作業前に行う手洗いの設備変更や、汚染区域と調理区域の動線（人の移動を示した線）も交わらないように考え直さなければならぬだろうな」

数日後から、新しい親会社の下で、工場を再稼働する準備が始まった。冷凍庫や加熱の巨大なボイル機やベルトコンベアーは、従来あったものを使用できた。だが、燻製機や真空パックを作るための包装機は、新たに導入しなければならなかった。親会社の間際の立会いの下、動線を確認し、狭い工場内にジグソーパズルの様に機械を設置した。また、作業前の手洗い方法に不備があるとの指摘を受けた。これまでは、流水と薬用石鹼のみで手洗いを行っていたが、更に消毒用の逆性石鹼も使用することになり、手洗い回数も変更になり、手順も複雑化した。

私と次長と生産管理部長は、何日も泊まりながら新しい工程の確認を行い、機械の使用法を学んだ。フィッシュデリー本社からは、大量の生産目標を提示があり、一日も早く稼働せよと、矢の様に催促が来る。我々管理職が現場の主任たちと共に、恐るゝ生産ラインを稼働させ、それが上手くいくと、パート従業員たちに教えながら、漸く製造開始にこぎつける事ができた。

何日かぶりに重い体を引き摺りつつ家に帰ると、かすみだけでなく妻も玄関に出迎えてくれた。

「おかえりなさい。ねえ、いいニュースがあるんだけど……」

「もしかして……」

私は何の事か察しがついた。

「そうなの！八週なの！あなた忙しそうだったから、黙っていたんだけど」

「これまでよく頑張ったな」これまでの不妊治療の苦勞を思い出して、やっと報われたと感じた。私は、かすみにも話しかける。

「かすみちゃんに、弟か妹ができますよお。仲良くしてね」
かすみは、私の顔を不思議そうに眺めていた。

夜勤明けの日、工場は次長に任せ、心療内科を受診することにした。工場の産業医である宇似医師に眠れないことを相談すると

「二週間以上、寝つきが悪かったら心療内科を受診してください。不眠はメンタルを崩しているサインかも知れませんが、メンタルを崩す原因にもなりますから」

普段ニコニコしている先生から、深刻そうな顔をされると私も心配になる。クリニックでは「うつ病とは言えませんが、かなり疲労が溜まってらっしゃいますね、お仕事休めませんか？」と担当医に聞かれ「とても休めません」と答えた。担当医は、不眠だけでも改善させましょうと、睡眠導入剤を処方してくれた。それを内服する事で、今まで寝る前にビールを飲んでも寝付けなかった私が、久々に深い眠りに落ちることができた。

本社から要求される生産量が多く、また新体制になって社員もパートも何名か辞めたので、従業員数を増やす必要があった。本社からの斡旋で、タイ・ベトナム・バングラディッシュから外国人留学生を採用することにした。

全従業員の半数近くに当たる二百名を雇用したが、ここからが大変だった。本来は管理職が行うべき衛生や安全教育に、時間や人手を割くことができなかったので、手洗いだけ教えて、後は主任などの生産ラインの責任者に丸投げしてしまった。次長からは「日本語が通じない人が多いと、現場からは不満の声が出ています」と言われたが、危険な作業には関わらせないように指示を出して、このピンチを切り抜けようとした。

何とか、人手の目途がついたと思ったのも束の間だった。慣れない留学生の受け入れに、私は元より、ほかの社員たちも戸惑っていた。実習生が手洗いをしないで、製造ラインに入ろうとしたので「待って！ちよい！ウエイト！」と声をかける。商品が流れているベルトコンベアーは、機械が動いている間は手をコンベアー内に入れることは安全上禁止されているが、守ってもらえない。我々管理職も常に巡回し、事故が起きないように見張って

いなければならなかった。

それでも事故は起きた。動線の変更により、転倒事故が頻発した。

包丁での切創事故も何度かあった。以前ならば、工場内で起きた事故は、産業医も参加する安全衛生委員会で発表し、スタッフ全員で情報を共有していただろう。更に、産業医に職場巡視を行ってもらい、事故現場の検証を手伝ってもらっていた。だが、組織変更による混乱で、会議そのものが行われていなかった。月に一度、来社する宇似先生には毎回頭を下げていた。

「申し訳ありません。今月も安全衛生委員会を開く目途が付きませんので……」

「では、時間外労働時間が飛び抜けて多い方の面談だけでも……」

宇似医師は、手ぶらで帰るわけにはいかないというように食い下がる。

「いえ、今は皆忙しいので、面談はちよつと……」

「新しい方を雇うより、今いる人を守る方が大切ですよ。穴の開いたバケツに水を注いでも、事態は改善しませんよ」

私は、うるさいな、今そんな暇ないんだよ、と言いたいのをぐつと堪えて「来月には落ち着きますから」と産業医を帰した。

一か月後、燃え尽きたように、生気のない顔をしていた次長がダウンした。その朝、起きたら体が動かなくなったらしい。心療内科を受診し『自律神経失調症』の診断を受けたと連絡があった。彼は、入社以来初めての有給休暇扱いで休み、そのまま退職することになった。

次長の退職で、再び私の業務量が莫大な物になった。生産管理部長を次長に昇格させて、急場を凌ぐとしたが、今度は生産管理部の人手が不足し、その社員から悲鳴が上がった。月百時間以上の残業をこなすものが続出し、社員は月に一人二人のペースで工場から去って行った。

社員が減っても、本社からの補充はなく、外国人留学生ばかりが送り込まれてきた。こ

の頃から、本社から生産目標の遅れを厳しく指摘され、私の気分は塞ぎがちで、眠れなくなっていた。

次第に私は薬を飲んでも眠れなくなっていた。

生産の遅れに痺れを切らした本社は、子会社を管理する部門の人間を送り込んできた。小太りの体型に紺のスーツを着込んだ男は「寒川です」と名乗った。私は、工場内を一通り案内し、生産目標に未達が続いていることを詫びた。

「生産目標を守れていない事も問題ですが、衛生管理も当社の基準では不十分ですね。作業前に行うべき体温の測定もされておりませんし」

資料を見ながら、寒川は私をギロリと見る。

「申し訳ありません。従業員は増えましたが、教育が不十分で……」

「失礼ですが、森須工場長。工場長には少し荷が重いのでは？」

「い、いえ」

私には、何の意味も分からなかった。

「労災も頻発していますし、退職者もでて、目標には届いておりませんし、工場長もお疲れの様ですし……」

「いえ、私は大丈夫ですし、もう少しお時間を頂ければ……」

「この辺で、工場長には、運営から一旦引いていただいて。休養を取って、リフレッシュしていただくのがベストだと思うんですがね。本社にもその様に報告しておきます。それとも、この現状を回復させる具体案がありますか？」

「はあ」

有無を言わせぬ圧力に負け、私は管理職から身を引いた。

本社から出向となった寒川が新しい工場長に就任し、私を含め、管理職にいた者の多くは、その立場を降りて生産ラインの現場で働く事となった。私自身は、下処理室に配属された。十数年ぶりに手に包丁を持ち、蛸の足を切る。一日中この作業を、外国人留学生二人と一緒にやった。

湿気を含みジトジトした窓のない部屋の一角で、私たちは机の上にまな板を置き、作業を始めた。巨大な蛸の足がトレイの上に山積みになっていて、それを一本掴む度に、ぬるぬるとした感覚が伝わってくる。それを一センチ程になるように包丁を入れていった。

ふと目の前を見ると、『トウアン』と名札のついた留学生がゴム手袋を両手に履いて蝸を切っていた。安全ルールでは『アラミド手袋』と呼ばれる金属製の防刃手袋をすることになっている。

「トウアン。アラミド手袋をつけてください」

「ハイ？」

私は、部屋の隅のテーブルに置かれていたアラミドを、彼女の目の前に持っていく。

「ノー、ノー」

「危ないから」

「使いにくいデス」

「ルールだから！」

「聞いたことないデス」

ふと、他の留学生を見ると、誰もアラミドをつけていない。私は諦めて、作業を再開した。

現場作業に慣れてきた頃、宇似医師が寒川新工場長に連れられて、作業場にやって来た。

この姿を、外部の人間には見られたくはなかった。私が下を向いて作業していると、寒川は宇似先生に「ほら、そこに前工場長が居ります」と私を指した。

「工場長！ご無沙汰しております」

宇似医師は駆け寄ってきた。

「お久しぶりです。もう工場長ではないですが」

「あれから、安全衛生委員会も職場巡視も何も行われていないんです。今日は、寒川様にお願ひして、巡視だけはさせて頂きましたが」

宇似先生は続ける。

「ただ、委員会も巡視のやり方も、寒川様や新しい管理職の方々は何もご存じないようなので、工場長から教えてあげて下さい」

宇似先生は、私の目をじっと見てくる。

「私は、もう工場長ではありませんので……」私は目を逸らした。

「工場長、大丈夫ですか？かなりお疲れではないですか？顔色良くないですよ。眠れていますか？」

先生が顔を近づけてくる。早く去ってほしいのに、余計な世話を焼こうとしないで欲し

い。私は居たたまれなくなった。

「大丈夫ですから、業務がありますので」

寒川が躊躇う先生を、別の部署へと案内していった。

「幸子、かすみ、ただいまあ」

私は疲れた体を引き摺る様にして帰ると、かすみだけが尻尾を立てて「グルニャア」と迎えてくれた。

部屋のドアを開けると、妻がドライバーを片手に、ナチュラルなカラーの木の枠と格闘していた。

「何組み立てているんだ？」

「ベビーベッドよ。通販で買ったんだけど、自分で組み立てるものだとは知らなくて

……」

私は慌てて「おい、もう臨月じゃないか！無理するなよ。俺がやるから」

妻の手から木の枠とドライバーを取り上げ、仕方なく家具の組み立てにかかった。

「このベッドね。桃の木からできているんだって」

「そうなんだ」

「この子、桃子って名前にしましょうよ」

「男の子だろ？」

「ベッドの名前よ」

「変なの。赤ちゃんの名前もまだ決めてないのに」

妻は、上機嫌で、近くにいたかすみの背中を撫でた。

この日も毎度の事ながら眠れなかった。枕元にあった本を開いてみた。妻から借りた本で、タイトルは『植物の不思議な能力』だった。そこには、植物は動物と違って動かないが、独自のコミュニケーション能力を使って進化したと書いてあった。動物の五感とはちよつと違うが、植物も音や光を感じ、各種の化学物質を感じ取り、私達が想像もつかないような多種類の情報を取得して、生存競争を有利に進めるのだそうだ。ちよつと、興味が湧く話だった。そういう意味では、植物は頭がいいのかもと感じし、今度花でも植えようかと考えているうちに、久し振りに眠くなってきた。

数日後、いつ工場長から降りたことを妻に伝えようと悩みながら家に帰った。だが、玄関には妻もかすみも出迎えて来なかった。妻の部屋のドアを開けると、妻が布団の上でお腹を抱えてうずくまっていた。かすみは、そんな妻の周囲を心配そうに歩き回り、妻の下腹部の臭いを嗅いでいた。

そこに目を向けるとシーツが赤く染まっていた。赤い染みを辿るとシーツから妻の尻全体を覆っているのが分かった。

「どうした？」

私は大声で妻に呼びかける。

「昨日から、お腹が痛かったんだけど、陣痛にはまだ早いと思って様子見ていたら、痛っ！」

「すぐ救急車呼ぶからな！」

やがて、家の外から遠くにサイレンの音が聞こえてきた。

妻を乗せたストレッチャーを何人ものスタッフが引っ張り、病院の『救急外来処置室』へと運んで行った。私は長い間、待合室にポツンと残された。何が起きたのか？赤ちゃんは無事なのか？幸子は？不安の渦巻く中、漸く外来処置室から医師が私の名前を呼びながら近づいた。

「早期胎盤剥離ですね」

産婦人科の救急外来担当だと名乗る老医師はそう告げた。

「ソ、ソーキタイバンって何ですか？」

「赤ちゃんに栄養を送る胎盤が、剥がれてしまい大出血を起こしています。大変危険です」

暗い待合室で、医師の声が響く。

「大丈夫なんですよね、赤ちゃん」

「いいえ、かなり時間が経っているので厳しいと思います。お母さん自身が危険なので、最悪の場合、子宮を切除することもあります。いいですか？」

「妻は、なんと言っていますか？」

「痛みが強いので、今鎮静剤で眠ってもらっています。なので、ご主人に承諾を得るしかないのですが……」

私は、せめて妻にだけでも助かって欲しかった。選択肢が他にない以上、子宮を取ることも承諾するしかなかった。ペンを借り、その場で手術承諾書にサインした。

手術は終わった。病室では私も妻も、燃え尽きてしまった様に茫然自失としていた。妻は、ベッドの上で上半身だけを起こして座っていた。長い沈黙の後、決意した様な眼差しで口を開いた。

「どうして、どうして赤ちゃん助けしてくれなかったの？」と目に涙を浮かべている。

「赤ちゃんは駄目だったんだって」

私は力なく言う。

「よくそんな簡単に言えるわね！子宮を取らない方法があったでしょ？」

「ないって先生が言った」

「あのね！私もう赤ちゃん産めないんだよ？わかってる？」

妻は、突っ伏して大声で泣いた。

妻は退院して、実家に戻る事になった。しばらくは、心と体を休めたいと言ってきた。

「気が済むまで、実家でのんびりしてきなよ」

私はそう言って、タクシーを送り出した。しかし、これで妻との繋がりはぶつとりと切れた気がした。妻は戻ってくる事はないだろう。私には二人で暮らす意義をもう見いだせなくなっていた。きっと幸子もそうだろう。

心のなかで「元気だな」と声をかけ、入院中の妻の着替えなどの荷物を自宅に持って帰った。家では、かすみがベビーベッドの上で横になっていた。年の所為か、寝ていることが多い。ベビーベッドの柵も、よく乗り越えて入り込んだなど感心した。

私自身も、体が動かなくなってきた。朝早く目が覚めても、布団から出られない。何とか出勤しても、自分の体ではないかの様に重い。作業場では、同僚に返事をするのも億劫になり、笑顔を作ることもできなくなった。蛸の下処理のスピードが遅い、と工場長から

注意されたが、どうしようもなく体が反応しなかった。

家に帰ると、同じく弱っているかすみの餌と水を取り替えて、布団で横になった。かすみは、ベビーベッドの上で水をぴちゃぴちゃと力なく舐めていた。私は何をすることもなくそれを眺め続けた。寝ようとしても眠れるわけではなかったが、体が動くことを拒否していた。

「俺も猫に生まれたかった。お前は寝ているだけでいいよな。俺は仕事に行かないといけないし……」

翌朝、そう呟きながら私の布団の上にしたかすみを撫でると、冷たい感触が手に伝わってきた。私は、妻が救急搬送された夜の事を思い出していた。

「お前も年なのに、幸子の心配までしてくれたんだよな」

話しかけながら、私は涙が止まらなかった。冷たくなった今、これまで、この天使にどれだけ支えて貰っていたかを理解した。ぼろポロと布団の上に水滴が落ちた。半日程、かすみを撫で続け、それから、やっとペット葬儀社を探す気になった。

かすみは、庭の隅の日当たりのいい場所に埋められた。春が近づいているとはいえ、まだ寒かった。

「かすみ、土が冷たくてごめん。でも、近くに種を植えておいたよ。そのうちお花が咲くからな」

私はかすみの埋めた周囲に、赤いゼラニウムの種を植えた。花には詳しくないが、花屋に教えられた花言葉『君がいて幸せ』が気に入ってこれを選んだ。春に花が咲くらしいが、今年は無理だろう。でも、いつか、かすみが寂しくない様に寄り添ってくれるだろう。

かすみが眠っている上に、何個か小さな石を乗せた。

数日後の夜、私は車を走らせた。山に向かうつもりだった。静かだが遠すぎない場所。そう思いながら、ぼんやりとハンドルを握っていると『やすらぎの森の公園』の看板がヘッドライトに照らされていた。そこに向かうと、広大な敷地を持つ公園の入り口が待って

いた。

入り口には鎖が掛けられていたが、簡単に外す事ができた。人に見つからないようライトを消して、公園内の駐車場に車を進めた。駐車場にも、鬱蒼とした木々が傘を差しており、それが駐車場とその奥の森の境界線を成していた。通りすがりに、二三台の車が止まっているのを見たが、人がいる気配はなかった。

私は入り口から一番遠い場所に、車を停めた。幸運にも近くには車は停まっていなかった。そこで、暗闇の中、月明かりだけを頼りに、かすみの写真をポケットから取り出した。

近くに梅が咲いているのであろうか、仄かに香りが車内にも入ってきた。私は、一旦エンジンをかけて窓を閉め、再びエンジンを切った。運転席のシートを倒し、家を出る前に二錠程飲んでいた睡眠導入剤を、追加して一シート分全部飲んでしまった。この薬もなかなか効かなくなっていたが、流石にこれだけ飲めば眠れるだろう。

「かすみ、ごめんね。色々ありがとう。お前という幸せだったよ。仕事忙しくて構ってやれなくてごめんね」

かすみに話しかけながら、涙が頬を伝わり、なかなか止まらなかった。

大夫意識が朦朧としてきた。副作用の所為だろうか、意識は落ちながらも気分は軽く高揚してきた。よし、今だ。

後部座席に置いてあった七輪を手探りで探し、その底にセットした練炭にバーナーで火を点けた。大きな火柱はやがて小さなものになる。炭の香りと梅の香りが混ざり合って、お香の様だった。やがて、煙が上がってきて車の中を満たすだろう。

私は念のため、缶チューハイを一気飲みしようとしたが、もう眠くて力は残っていないかった。これでぐっすり眠れる。退職届も郵送しておいた。自分の持つ何もかもを失ってしまった。

この世界に私が残る意味などなく、私自身も世界から退場する番が来ただけだった。そう考えると、背負っていた重荷を全て降ろした所為か、ちよっと幸せな気分できえあった。

久しぶりに熟睡できたように思う。まだ眠い目を開けると、大きなガラスが目の前に広がっている。その向こうにはスクリーンカーテンであろうか、無地のクリーム色に覆われているだけだった。小さな部屋にいるようだった。床には何も敷いておらず。白い板の様な硬い物が体に当たっていた。不思議と痛くない。

えっと、私は確か、以前に人生の灯を自分で消したのではなかったか？ここは、死後の世界？それとも病院？

部屋が暗いので電気を点けようと、スイッチを探したが見つからない。そもそも上を見上げて電球一つない。その代わり、右側には赤い大きなプラスチックの家具であろうか？体が入りそうなくらいの窪みのある大きな物だ。荷物入れであろうか？ここがどこかをどうしても思い出せず、考えていると「お兄ちゃん」と左側から私を呼ぶ声が聞こえた。そちらを向くと、正面よりはやや小さな窓があり、その窓から可愛らしいネコ科の動物がいた。仔猫の顔をしているが、相当大きな猫だ。まさか、虎ではないよな。私と同じ位の体の大きさはあるだろうか？黒と茶色と縞模様で、お腹が白だった。巨大ではあるが優しいような顔をしていた。でも疑問が多すぎた。

「誰？なんで喋れるの？まさか俺の話も分かるの？なんで俺がお兄ちゃん？」

「ちよっと、一度に色々聞かないですよ。お兄ちゃんだって喋っているじゃない。お兄ちゃん、私のこと忘れたの？」

まるで覚えがなかった。どうして私が、猫のお兄ちゃん？落ち着こうと、座って下を向いた途端、目の前に巨大な茶色と黒の縞々のファーが現れて吃驚した。

「なんだよ。毛皮か？」

ふーっと息をつくくと、巨大なファーが左に動いた。

「何？熊？狸？お前誰だよ！」

飛びのくと、ファーは左方向へさっと消えた。恐るゝ左方向へ顔を向けると、巨大なファーは私の尻へと繋がっていた。そこから視線を移動させると。尻から胴体、手足に至るまで茶と黒の長い毛に覆われていた。まるでキジトラ柄じゃないか。兄ちゃんと呼ぶ猫も同じ様な柄だった。ただ、あつちは背中が茶色と黒の縞で、お腹は白い縞三毛模様だった。私の方は、お腹に白い部分はなかった。私は自分がファーに包まれている理由が分かった。何故お兄ちゃんと呼ばれたかも。

「ははあ、茶色と黒の柄で色がそっくりだから、お兄ちゃんと思っっているんだな。仕方がないなあ、ちよっと今脱ぐから待ってて」

私は、隣の猫に呼びかけながら、服の継ぎ目を探したが、見つからない。背中にファスナーを探そうとしたが、背中に手を回すことが一切できない。

「あれ？肩甲骨硬いな。後ろに手が回らない。四十肩か？」

少し焦りだすと「お兄ちゃん。何やっているの？」

「いや、おかしいな。背中にチャックがあると思うんだけど、猫ちゃん見てくれる？」

どうやら私の話を理解しているようなので、この際細かいことは考えず、猫の力を借りることにした。小さな窓の方に背を向けてみた。

「何もないよ。変なお兄ちゃん」と、隣の猫は笑った。

これは夢だ、私は死ねなかったに違いない。そう思っ手を見てみる。白くて長い毛に覆われたモフモフが見える。猫なら『白い靴下』と呼ばれる代物だ。白い物だから代物？うまいこと言っている場合じゃない。まさかと思っしたが、掌を握ってみると爪がにきつと飛び出してきた。そつと、その爪で腹をツンツンとついてみる。チクチクと軽い痛みがあった。

「お兄ちゃん。あたしと一緒に、生まれ変わったんだよ。前はニンゲンだったでしょ？今回は猫の兄妹という事で、ヨロシクね」

「は？やっぱり夢か？俺には妹なんかいなかったぞ！」

「今回は、つて言ったでしょ！でも、お兄ちゃんがニンゲンだった時も、一緒にいたんだよ」

「も、もしかして幸子？いや、でも、そんな雰囲気じゃないし……」

「奥さんだった人でしょ？赤ちゃん残念だったよね。あたしも悲しかった」

「え？誰だろ？まさか？かすみ？」

「その名前は言わないで！あのクソ猫！思い出しただけでイライラする」

隣の猫は、尻尾を左右にブンブンと強く振った。私には、猫を飼っていた経験から、これが猫のイライラのサインだという事が分かっていた。

「お兄ちゃんと奥さんが、あいつを甘やかすからつけ上がるのよ！あいつ、お兄ちゃん達のまえでは猫かぶって！もう！」

「仲良くなかったんだね。そっか、悪かったな」

「これで縁が切れたと思ったのに！もうすぐここに来ますよ。あのニャンカスが！」

「そうなの？かすみに会えるの？」私は頬が緩んだ。

間もなく、目の前の大きなガラスの向こうにあるスクリーンが上がった。その直後に、背後にある白い壁が、ガタガタと音を立てて横に開いた。壁だと思っていたら引き戸だったと、今更気付く。巨大な人間の手が伸びてきて吃驚したが、自分は猫だと思ひ込むことで、何とか冷静さを保った。でも体の震えは止まらなかった。

「大丈夫でちゅからねえ」と、伸びた手の主が赤ちゃん言葉で話しかけてくる。馬鹿にするんじやねえ、と憤りを感じたが、自分ではどうする事も出来なかった。伸びてきた大きな手に掴まれ。なすがままに任せた。掴まれて、白い箱の外に運び出された。

運ばれた先には、大きな茶色の丸いテーブルが置いてあり、そこには、金髪でサンダラスをかけた若そうな女性が座っていた。私は、大きな手からサンダラスの女性の胸元へと移された。

「こちらは、お客様の予約された、ノルウェージャンフォレストキャットの男の子です。ノルウェーの森に生息する、由緒正しい大きな猫ちゃんです。神話では、女神様の車を引いていたともいわれています。もうすぐ四か月です。二回目のワクチンは間もなく接種予定です。今ご購入して頂いても、三回目までのワクチンは当店でサービスさせて頂きます」始めに私を掴んだ大きな手の主は説明している。話の内容からして、ここはペットショップで、さつきまではショーケースに入っていたことを私は漸く理解した。

「いやあん、超可愛い！着ぐるみみたあい。イインですか？今日連れて帰っても？」サンダラスの女性は尋ねる。

「もちろんです。ちなみに、あちらは同じ母親から生まれた女の子です。背中黒と茶色の柄がこの子とそっくりでしょう？あちらの子はお腹が白いのがチャームポイントなんですよ。この二人、仲が良くて、お世話してても、お兄ちゃんと妹って感じがいつもすると、他のスタッフも言ってますよ」

私は、女性の胸からテーブルに視線を移す。エプロンをかけた女性が、さつきまで私と喋っていた猫を抱いて連れてきていた。エプロンをかけた女性は、ペットショップの店員という事か？

「いやあん、この二頭を引き離すのは可哀想！どちらもあたしが面倒見ますう」

サンダラスの女は、そう言うのと、財布からカードを取り出した。なんだ、この頭の悪そうな女は？喋り方はまだしも、猫をもう一頭衝動買いして大丈夫なのか？私はこいつと一緒に暮らすのか？私は、抵抗しようともがいてみたが、無駄だった。

「やーん、この子喜んでるう」

「この子は元気一杯ですよ。良かったでちゅね。こんな大スターに飼ってもらってね。きつとおうちも大きいでちゅよ」

「いやーん。大きくなんかないですよ。店員さん、トイレとお皿もお願いします。キャットタワーも大きなものをください。すみません。お店の開店前に来ちゃったりして」

「いいえ、お客様が営業時間にお越しになられると、ファンが詰めかけてパニックになりますからね。お気遣いありがとうございます。では、こちらが契約書と注意事項です」

話は私と猫の意思とは関係なく進み、二頭は、それぞれ別のキャリーケースに入れられた。

「お兄ちゃんだけならともかく、何で私まで？良かったね、あいつに再会できて」

車のエンジン音がする中、キャリーケースの隙間から、猫が私に話しかけてきた。声に嫌味がこもっている。

「やーん、フローレンスちゃんが鳴いているう。どうしたの？」前方のシートから、サングラスの女が振り返ってきた。

「お前、フローレンスって名前になったらしいな。良かったな」

「あの女、センスないわね」

「似合ってるぞ、キャハハ」

私は可笑しくなってきた。サングラスの女は再び振り返る。

「やーん、辰則も喋ってるみたあい。本当に二人は仲が良いのね」

「タツノリだと？俺タツノリ？」私はがっかりする。

「良かったね。愛する飼い猫に名前まで付けてもらって。タツノリ兄ちゃん」

ふと聞きたかったことを思い出す。

「そういえば、フローレンス。お前、俺と一緒に居たって言っていたよな？誰だったんだ？俺はどうして今、猫になっっているんだ？」

「その名で呼ぶの止めてくれる？お兄ちゃんが何故猫に生まれ変わったかなんて、分かる訳ないじゃない。私の事、覚えてないか。そうだよね」

「勿体ぶるなよ。人間だった頃の俺は、前世って事か？どうして分かる？」

「私、前世が植物だったからね。コミュ力高いんだ。桃だよ。思い出せない？以前はお話

しでなかつたけど、私も猫に生まれ変わって、やっとお兄ちゃんとお話しできるね」

「えーっと、……ベビーベッドの桃子かあ。いやあ、ベッドに魂みたいなモノがあるとは思わなかったからな」

私は戸惑いながらも、この話を受け入れないと混乱しそうだったので、形だけでも信じてみる事にした。自己欺瞞ってやつだ。いつか読んだ本にも、植物には不思議なコミュニケーション力があるとか、書いてあったし。

「うるさい猫共だなあ。だから、俺は犬がいいって言ってたんだ」

前の席から男の低い声が聞こえてきた。振り返らないところを見ると、運転席に座っている様だった。

「犬だって吠えるじゃん。良いじゃない、賑やかで」と女が答えた。

「お前がそう言うなら、いいけどよ」

私は、自分の元飼い猫を『お前』呼ばわりされて、少しむっとした。

「桃子、運転席の男は誰なんだ？」

「お兄ちゃん、あの男、機嫌悪そうだから、今は静かにしよう。あの男から危険な臭いもするし。家に着いたら説明するね」

車は、薄暗いトンネルのような所に入り、やがて停車した。新居に着いたのだろうか？

キャリーケースから出されると、そこには絨毯が敷き詰められた、広大な空間が広がっていた。どうやらリビングルームの様で、低いテーブルと巨大なテレビ、部屋の間にはギターが何本か立て掛けられていた。ギターに目を凝らしてみると薄っすらと埃があるのが気になった。部屋の壁沿いには、キャットウォークと言うものか、長い棚のような板が、何枚も壁に打ち付けられていた。長い板は、階段の様に、一枚、また一枚と、高さを変えて備え付けられていた。私は、喜んだ振りをして、そのキャットウォークに登って、一番端の窓際まで近付いて行った。

「キヤー、辰則が気に入ってくれたみたいよ。早く降りておいで、首輪つけてあげるからね。辰則は青かな？」

女は、青い革でできた紐の様な物を振り回している。女の声を背に、私は窓の外を見る。空と東京タワーの様な塔しか見えない。桃子が後ろから追って来た。

「どうやら、高層マンションみたいだな。しかも都内の」

「あの女、金持ってるもん」

桃子は当然、といった顔をする。「あれよ、あれ」

桃子の視線の先を追うと、テーブルの上にビラのような物が置いてあった。私は、キャットウォークから飛び降りて、桃子も続いた。ビラはカラーで印刷されていて、女の顔がアップで映っていた。飼い主になる女性と同一人物の様だ。顔の下には **Jelly T** と印字されていた。

「これ、かすみ？ジェリーティーって書いてあるけど……」

私は桃子に聞きながら、女性の方を見た。少し離れた場所で、さつき車内で怒っていた男と、キャットタワーの配送時期について話し合っている。サングラスを外した女の顔は、かなりの美人だった。全体的に小顔で、目はアーモンドの様にくっきりとし、鼻は高めで、唇はふくよかで、時々アヒルの様に尖らせる。それがまた、可愛らしさを増していた。

「お兄ちゃん、見過ぎ。良かったわねえ、あいつ、猫の時も外見だけは一流だったもんねえ。今はジェラートっていう名前らしいよ」

「なあ、このスペルで何故ジェラートなんだ？」

「あたしに聞かないでよ。あたし文字よくわからないし。頭が悪いんじゃないの？」

「で、かすみは何の仕事をしているんだ？」

「タレントらしいよ。テレビによく出ているって」

「お前詳しいな。それも植物の能力でわかったのか？」

「いや、ショップの店員が噂していたのと、バックヤードで流れていたテレビで」

私は、チラシから離れて、部屋を壁伝いに歩いてみた。不思議なもので、自分が猫だと自覚してから、目新しいものは鼻で臭いを確認しないと気が済まないような気がしてきた。カーペットの小さな糸くずから冷蔵庫まで、一つ一つ確認しながら歩く。後ろからかすみの「キヤー、楽しそうに歩いている！」という歓声が聞こえる。ギターに近づくと、男の「おい、ギターに近づくんじゃねえ！」という声が聞こえた。私は大きな声に吃驚して、反射的に声の主へ向きを変え、耳を倒し、背中をラクダのこぶの様に持ち上げる姿勢をとった。声の主の男は、中年にさしかかる年だろうか、強面で、目は大きく見開き、鼻は低く、両耳へ長いもみあげを垂らしていた。

「サアタちゃん、やめなよ」と、かすみの声が聞こえて、男は私に近づきかけるのを止め、私もこの反射的にとった姿勢を解除した。どうやら、この姿勢は猫なりの戦闘態勢の様だ。

「なあ、桃子。このギターは男の物なのか？二人は結婚しているのか？」

「そうみたいね、あつちに、あの男のポスター張ってあるのを見つけたよ。行きましよ」私達は、リビングを通り抜け、空いているドアの隙間から、別の部屋に入った。巨大なベツドらしい物が置いてあり、天井にはポスターが貼ってあった。私は、ベツドの上へとジャンプして、ポスターを見に行った。ポスターの写真では、さっきの短気な男がギターを持ち、別の陰気そうなくせ毛の長髪男がキーボードの後ろに立っていた。バンド名であろうか？大きな文字で **Hevie Look** と書いてある。ギターの男の写真の下には地金沙汰と書いてあった。

「なあ。なんて読むんだ？ヘビエルーク？チキンサタ？」

「あたし文字分らないって言ったでしょ。確か、『ヘビーロックのじごくのかねのさあた』とかショップの人から聞いたことあるよ」

「え？スペルも漢字も滅茶苦茶じゃないか？わざとか？」

「知らないわよ」

私は、この男の所属するバンドは、売れていないと直感した。

「この沙汰さあたとやらは、恐らくテレビに出たりしていないんだろ？」

このネーミングセンスで売れたなら世も末だ。

「昔は少し売れたらしいって。今は同じ事務所のジェラートのおかげで生活できているんだって。ヒモだって店員たちが言ってた」

「かすみめ、俺は、お前にヒモを養わせるために工場で一生懸命働いていたんじゃないぞ！」

「お兄ちゃん、前世を持ち出さないの。それに、以前あいつはお兄ちゃんに養ってもらってたんだから、いい気味じゃない？多分すぐ別れるよ。店員たちもそう言ってた」

私は落胆して、ベツドから降りた。カーペットに紙片が落ちていた。そこには歌詞の様な物が、数行書かれていた。

神をも恐れぬ電光石火 作詞作曲 地金沙汰

夕暮れの教会の十字架へし折るぜ

俺は危険なサンダーボーイ

光速でお前を海に沈めるぜ

俺という深海の中で

お前はアンコウとなり俺を照らすのさ

今時ボーイ？ しかもあいつ、いい年だよな？ここまで読んで、私は眩暈がして読む気を無くした。桃子の言う『危険な香り』の正体が分かった。ある意味そうだ。

「お兄ちゃん、なんて書いてあるの？」

桃子は、尻尾をピンと立て、口横のヒゲを前方に向けて来た。多分、好奇心のサインだろう。私は、教える気にはなれなかった。

「ちよつと！どういう事？」

ある日、機嫌を悪そうにしていたかすみは、夜に沙汰が帰ってきて部屋に入るなり、手に持った雑誌をテーブルに叩きつけて怒鳴った。

「あ、それ？本気で信じてるの？い、いや打ち合わせでさあ……」

かすみが指した先には、週刊誌が広げられていた。桃子はトイレ中なので、私が週刊誌を見に行くと、写真と記事が載っていた。写真では、二人の男女の影がキスをしており、記事のタイトルには『裏切りの愛！地金沙汰。恋人ジェラートの小遣いで元モデルと朝までデート&路チュー！』とあった。タイトルだけで、もう読む気がしなくなった。

「お兄ちゃん。なんて書いてあるの？」

桃子はヒゲを前方に向けて寄って来た。

「桃子、いいからあつちで遊ぼう。ここは恐らく戦場になるから」

二人でベッドルームに入り、遊ぶことにした。後ろではガラスの割れる音がする。

「痛た、本当だって。プロデューサーがさあ……。危ないって。アイロンはやめろ！あいつ酒癖悪くてキス魔なんだって！多分」

私は、せめて売れてから浮気しろよ、と思いつつながら、尻尾を揺らせて、桃子が飛び掛かって狩りの練習になる様にしてやった。

数日後、私達猫は、かすみと体を引き摺る沙汰に連れられて出かけた。私はかすみに、桃子は沙汰に抱っこされて、建物内に入った。長い廊下をくぐって着いた先には、無数の照明に照らされた茶の間が見えた。その前にはテレビカメラが何台もあり、それぞれにコ

ードが複雑に絡まっていた。本物を見るのは初めてだが、ココはテレビスタジオだと確信した。

「はい、ジェラートさんお疲れ様です。この二匹のちゃん猫と沙汰さんがゲストという事で、こちらでお願いします」

色眼鏡をかけた、胡散臭そうな男が、我々を所定の位置へと誘導する。

「こんな時に、彼氏と出演なんてツイてない」かすみは不満そうに言う。

「じゃあ、リハに入ります。3，2，1」

私を抱っこしていたかすみ、さっきの不機嫌とは打って変わって、明るい声で「こんにちは『ジェラートのねこねこにゃんにゃん』の時間がやってきました。司会は、今日も私ジェラートが務めさせていただきます。今日は、なんとゲストにダーリンが来てくれました。ヘビローックのリーダーで、ギター兼ボーカルの地金沙汰さんですう、拍手う」と私の両手を持って、無理やり拍手させた。かすみ、肉球で拍手しても音は出ないぞ。紹介された沙汰は、恥ずかしいのか、そのようなキャラ設定なのか「どうも、沙汰です」といつもより更に低い声で答え、かすみの近くに寄る。

「今日は、私達が最近飼い始めた猫ちゃん達も紹介しますう。今抱っこしているのが、辰則君です。ノルウェージャンフロレストキャットで生後六か月です」

かすみは、そう言いながら振り返り

「あちらの炬燵の上に寝ているのが、妹のフローレンスちゃんです。同じく生後六か月です」

かすみは喋るのが上手く、しかも仕事中和プライベートの気分を見事に切り替えていた。かすみの成長を、私は素直に喜んだ。

「ハイ、オックケーです。オープニングはこの位で、次にノルウェージャンの解説VTR挟みます。で、その次に沙汰さんを紹介するくを撮りたいので、ギターを弾いて頂きます。ギターは持ってきて頂きましたか？」

色眼鏡の男は沙汰に確認する。恐らくこの男はディレクターって人種だ。

「持って来ただけどお。昔のVTRで良くないですか？演奏シーン」

「いやいや、ちゃん猫達と一緒に入って、弾いて頂きたいので」

「わかりました」

沙汰は渋々承諾する。

「お兄ちゃん。沙汰ってギター弾けるの？練習してるの見た事ないけど」桃子が囁く

「俺も」

私と桃子は、沙汰の近くに誘導させられ「ジャンジャカジャン」と騒音を聞かされた。これに辟易しながらも、喜んでいる風を装って、沙汰の後ろで飛び跳ねたり、沙汰の足に猫パンチを入れてみた。

「いいねえ。じゃあ、一旦休憩入りまーす」

ディレクターらしき男がそう言うと、カメラマンや他のスタッフたちは、持ち場を離れ、三々五々に集まり、休憩か打ち合わせの様な雰囲気を作っていた。沙汰は、赤いギターの余韻を楽しむ様に。ギターから延びるコードをアンプに繋げたまま、弦を引つ張って「キユーン」と音を鳴らして悦に入っていた。

私から見ると、子供が久し振りにおもちゃで遊んでいるかの様だった。こいつ、長い事ギターに触っていなかったな。音がうるさくて不愉快なので、桃子を連れてセットの炬燵の所まで下がった時、スタジオがざわついた。

スタジオの入り口に背の高い女性が立っており、スタッフたちの視線が一斉に注がれた。あちこちでスタッフ達の囁きが、微かに漏れている。私は、素知らぬ顔をしつつ、耳をピンと立て、近くで話している一組の会話を盗み聞きする。

「あの人、確か、週刊誌の」

「ええ？沙汰さんとキスしてた？」

「いいのか？ジェラートさんもいるぞ。修羅場になるぞ」

「よく来れたな。大事にならなきゃいいけど」

その女性が沙汰を見つけ、手を振る。かすみは緊張の面持ちで女性を睨む。沙汰は一瞬、かすみに一言二言話したかと思うと、手を振りながら女性の方へ向かって行った。沙汰は、照れ笑いを浮かべながら、入り口近くで、その女性と親し気に喋っている。残念ながら、此処からでは耳をピンと立ててそちらの方向に耳を向けても、会話の内容までは分からない。かすみは、入り口近くの二人をじっと見ている。桃子が「あたし、二人の会話聞いてこようか？」と言ってくれたが、止めた。

私はかなりイライラしていた。ついこの間、あんな事になったのに、沙汰は懲りていない。まだ、足を引き摺るくらい痛い目に遭っているのに、まだ女と縁が切れていないのか？かすみは爆発する前に、私が止めよう。かすみにこれ以上恥をかかせてはいけない、仕事

の邪魔をさせないようにしよう。そう決めた。

沙汰と女の談笑は止まらない。私は二人を引き離すことにした。でも、どうやって？猫の体では物理的には無理だ。ふと横を見ると、さっきまで沙汰が弾いていた赤いギターが立て掛けてあった。ギターはアンプと繋がのまま放置しており、アンプのスイッチは点いたままだった。何をしていたのかわからないが、とにかく音を出して沙汰の気を逸らそう。私はギターの前で、後足を支えに立ち上がり、前足でギターの弦を六本共素早く引っ掻いた。

「ジャンーン！」

アンプから大きな音が出て、その場にいた全員の視線を背中に感じた。そのまま、何度も弦を引っ掻いた。

「ジャンジャンジャン、ジャジャジャジャジャンーン」

音が続く中、ついでに六本ある弦の内、半分くらいを人差し指の爪で引っ掛けて引っ張りながらこすってみた。「キュウイン」と音が変わった。背中に拍手の音やざわめきを感じ、私はちょっと意外だったが、気分は悪くなかった。

沙汰が慌てて駆け寄ってきた。

「馬鹿野郎！俺のギターに何を……」

「あんたが悪いでしょ！商売道具のギターを置きっぱなしにして！辰則は悪くないよ。ヨシヨシ」

かすみが私の頭を撫でながらかばってくれた。そうだ！猫のした事に一々目くじら立てるんじゃない！私だってかすみは何をしても怒ったりしなかったさ。ベビーベッドの手摺りを齧った時だって。その瞬間、はたと気が付いた。そうか、それで桃子はかすみを嫌っていたんだ。申し訳ない。視線を桃子に向ける。桃子は我関せずと、カメラの近くで毛繕いをしている。

かすみ「怒鳴らなくてもいいのよね。沙汰が悪いよね。可哀相に」と、私を抱き上げようとした時であった。

「ちょっと待ってください。この猫ちゃん。リズム感あるわ」

後ろから、女の声があった。振り返ると沙汰と噂になった女が立っていた。しまった、皆の気を引いてトラブル回避したかったただけなのに。かすみと女の距離が近くなる。かすみ、キレるな！私は不安そうにかすみを見上げる。こうなったら、一触即発を避けるために何かするか？どうする？甘い声でも出すか？迷ってオロオロしてしまった時に聞こえたやり

取りは意外に静かなものだった。

「ジェラートさんですね。初めまして、私……」

「知っています。元モデルで音楽プロデューサーのNagomi^{ナゴミ}さんでしょ。沙汰と泥酔しながら打ち合わせされていた」

「ご迷惑をおかけして申し訳ありません。あの、私、酒癖悪くて、沙汰さんとは何も……」

「わかっています」かすみはにっこりと笑う。

「沙汰とは同じ事務所なので、お話は聞いていました。ナゴミさんの酒癖も」

「おい！俺の事信じてたなら、なんでこの前あんなにキレたんだよ」

沙汰がくつてかかった。お前は黙ってる！私が沙汰に向かってフーっとうなるのを、かすみが撫でて止めた。

「全く、手前はよ！手前の浮気に怒ってたんだねえよ！再起をかけた大事な時期に、他のスタッフも連れずに、二人つきりで酒飲んで、あっさり写真に撮られる無防備さに呆れてんだよ！」

かすみは沙汰を思い切り睨む。私は、心の中で拍手した。かすみ、ちよつと怖いけど、立派な大人の人間になったな。昔は、私の後を追い回してばかりだったのに。しっかりといたい奥さんになれるぞ。いや、別に沙汰の奥さんって意味じゃないが。

沙汰は「わかったよお。今後は気を付けるって」と言いながら、胡麻化すかのように、手を伸ばして私を抱き上げようとする。

「ちよつと待って、沙汰さん。この猫ちゃんをギターの前に置いてみて。スタッフさんすみません、スピーカーとUSBコード持ってきて下さい」とナゴミは沙汰や近くのスタッフに指示した。ナゴミが何やら機械を取り出して、コードでスピーカーに繋ぐ。「タン、タン、タタタン」と小気味いい音が聞こえて来た。ドラムだ。

「何やってんすかあ」沙汰が口を尖らせる。

「しっ！いいから」

私は、自分に何を求められているのかが分かった。私はギターの前で後足で立ち上がり「タン、タン、タタタン」の終わりの一拍の間に、タイミングを合わせて「ジャーン」と弦を引っ掻いた。それを数度繰り返した。

「この猫ちゃん、辰則君だっけ？わかってるわ！私にいいアイデアがあるんだけど。沙汰さん、番組の収録終わったら、時間作って頂戴。スタジオ予約しておくから。もちろんイエムさんも呼んでね」

「はあ、わかりました」
イエム？もしかして、ポスターに写っていた陰気そうな男か？『源家夢』って書いてあったな。あれでイエムって読むのか。誰がつけたか知らないが、このネーミングセンスで売れていた時期があったことに感心した。

撮影が終わり、私達はキャリーケースに入れられ、車で運ばれた。着いた先は、音楽スタジオオってやつらしい。かすみが、猫用簡易トイレを持ってきてくれたので、外出ばかりの一日だが助かった。

キャリーケースから出されると、そこはフローリングの床に、ドラムセットやスピーカーが所狭しと並べられた部屋だった。キーボードも置いてあり、その前には長髪で目が窪んだ中年男性が立っており、何やらでかいキーボードのスイッチを触っていた。スイッチをいじる度、ドラムやベースの様々な音が聞こえる。これはシンセサイザーっていう機械らしい。この人が家夢か。ポスターの写真よりも根暗で幸薄そうに見える。

私は、ドラムセットのシンバルに登って様子を覗くと、部屋の一角には大きなガラスが張っており、その向こうに小部屋が見えた。小部屋にはナゴミとかすみと桃子が見えた。桃子は心配そうな顔をして、かすみに抱きかかえられていた。

「じゃあ、沙汰さん。椅子に座って！辰則君が弾きやすいように、ギター下げて！コードは沙汰さんが押さえて」

室内のスピーカーからナゴミが指示する。私と沙汰はギターを挟んで向かい合う形になった。沙汰がギターを縦に置き、左手でネックの部分の弦を押さえる。音の高さは沙汰に任せるらしい。そして私はギターのボディという太い部分を、引っ掻いてかき鳴らすことになるらしかった。二人の顔が映るようであるうか、カメラが私と沙汰の真横にセットされた。

「では、沙汰さん家夢さん。ちょっと音出してみましょう。一発録りで二人の音を同時に録ります。まずは新曲『銀河でお前とビッグクランチ』お願いします。」スピーカーから指示があった。

無音の切り裂くように、沙汰のボーカルソロではじまる

「銀河鉄道のお、星降る空で、お前のエントロピーは増え続ける、どこまでもお」

私は後足で立ち上がり、好きなところで、弦を引っ掻いてそれに続いた。そのあと、家

夢のシンセサイザーが設定した音と思われる、ドラムの打音や、ベースの「ズンズンズン」が混ざった。私は、興奮して、夢中になって弦を引っ掻いた。途中で後足が疲れて立っていられなくなり、四つ足に戻ると、そこは沙汰が弾いてフオローしてくれた。

「良いじゃない！ちよっと、プロモーションビデオ代わりに動画サイトに上げてみるね」
ナゴミは嬉しそうな声で言った。

「キャハハハ、何これ」

マンションにあったかすみのパソコンで、ヘビーロックの新曲として挙げられた動画を見て、桃子は笑う。

「お兄ちゃん、息切れしているじゃない。面白い。沙汰、左手だけしか使ってなくて間抜けだし」

「桃子、こっちの方が面白いぞ」

私は、パソコンのキーボードを爪で操作して、別の動画を桃子に見せる。そこには、真つ黒な背景に浮かび上がった長髪の男が、下を向いて喋っていた。

「俺、沙汰さんには感謝しているんです。ホームレスだった俺を『バンド組まねえ？立っているだけでいいからさ』と誘ってくれて。家夢って名前までつけてくれて。初めは『家無し』って漢字だったんですけど、家に住む夢が叶うように『家』と『夢』って漢字に変わったんです。それから超練習しましたよ。詳しくは、明日発売の『家夢』。リストラ男がロックで家を借りてやる』を読んでください。いやあ、沙汰さんマジ聖人だし、ギターテクは神ですわあ」

最後の一文は、絶対沙汰に言わされているな。桃子はひっくり返ってお腹を見せて笑っていた。

私がギターを弾いた動画への反響は、予想していたよりも遥かに大きかった。再生回数の桁数が数えきれないくらいだった。

「ちよっと！何ふざけたこと言ってるの？辰則をバンドメンバーにして、ライブに出すですって？」

マンションで、かすみは、私を太腿に挟んで、私の爪を丁寧に切ってくれている。

「見てよ！この爪！」

かすみは私の肉球を持ち上げて押し、まだ切っていない爪を見せた。ナゴミと沙汰は覗き込む。

「一曲弾いただけで、爪ボロボロじゃない！」

「そうか。それは可哀想だな。気付かなかった、悪かった」

沙汰は、申し訳なさそうな顔をしている。

「そうね、ごめんなさい。私が軽率だったわ。ねえ、肉球に大きめのピック（ギターの弦を弾くための人工の爪）を着けてみたらどうかしら？」

ナゴミの提案に、かすみはまだ渋い顔をしている。

「それと、辰則君に演奏してもらうのは、新曲『銀クラ』だけ。それも間奏のギターソロに限定するわ。出演は短時間でも、話題として引っ張ってもらえれば、それでいいの。どう？」

私は、「うにゃあ」と一声鳴いて、かすみの足から抜け出し、近くに立っているナゴミの足へ、スリスリと胴体を擦り付けた。「その条件でいいよ」のサインだったが、伝わっただろうか？

「辰^たちゃん、いいの？」

かすみが不安そうに聞いてくる。言葉で伝えられないのがもどかしい。

「辰則君の事、注意して見てますから。この子が嫌そうにしていたら、すぐに止めますから」

ナゴミの真剣な表情に、かすみは折れた。

「少しだけですよ。猫は大きな音が苦手だから、演奏終わったら、すぐ静かな場所で休ませてね。おやつも忘れずに」

かすみは優しい子に育ったなあ。私は、嬉しくて、かすみの太腿の間に戻った。柔らかかーい。

ナゴミ達は約束を守ってくれた。私の出演直前まで、静かな会議室の様な場所にくつろいだ。出番が来たら、ナゴミに抱っこされて舞台の袖の様な場所を通って、ステージ中央の沙汰のいる場所まで連れていかれた。予め、注意事項として伝えられていたのだろうか？袖にいた時は、相当歓声がうるさかったが、私の登場で、会場はシンと静まり返った。沙

汰の歌とギターと、家夢のシンセサイザーが作り出すドラムの音だけが響く。その音量も控えめに聞こえる。

沙汰の前に着いた直後、沙汰の歌が止まり、ギターを私の目の前に差し出した。ドラム音に合わせて、ギターの弦を十秒程引つ掻き、再びナゴミに抱っこされてステージから去った。袖を通って戻るとき、遠くで歓声と拍手が鳴り響くのを感じ取り、成功を確信した。

帰りの車の中で、運転席の沙汰の機嫌は、予想外に悪かった。あれだけの歓声が入らなかったのか？耳を立てて、沙汰達の話を聞いてみる。

「やってらんねえよ。辰則の出番が終わったら、客の大半が帰りやがった」

「チケット捌けて良かったじゃない？」

隣のナゴミの声に慰めが込められているのが分かる。

「ほとんど客いないんだぜ。超テンション下がっちゃったじゃねえか！なあ家夢？」と怒った声

「今日は、辰則君のファンがたまたま多かったという事で、いいんじゃないすか？」

後部座席で私の隣にいる家夢に、不満はなさそうだった。

「あいつら、猫がギター弾く絵を見たかっただけじゃねえか！ロックを分かかってんのか？」私は、聞き耳を立てていて、少し苛々してきた。どうやら、久し振りのライブみたいじゃないか？チケットも売れて、何が不満なんだ？客が皆、自分のファンじゃなきゃ気が済まないのか？考えていると、ナゴミが諭す様という。

「今回は辰則君に助けてもらったの。文句言わないで。ねえ、辰則君」

キャリーケースの天板が開き、細くて長い指が、優しく私の頭を撫でていく。

「これで、話題は作ったから。沙汰さんは早く次の詞を書いてね、曲は私が提供するから」

次の日の朝

「スタジオ取れたから行ってくる」

沙汰はムスツとした顔でマンションから出て行った。私は、桃子やかすみと一緒に見送った。ギターを持って行ったから、嘘ではないとは思うが、浮気の可能性もあり得るとちよつと心配になった。

見送った後、かすみに甘えた振りをして、彼女の足に体を擦り付け、お約束通り抱っこしてもらおう。その時に、かすみの表情を確認する。嬉しそうだった。この分だと、本当に練習か仕事に行ったのかも知れない。でもな、かすみ、お前が優しくて簡単に人を信じてしまう所は、ちよつと心配だぞ。

「帰ったぞ」

低い声で沙汰が帰ってきたのが分かった。かすみは、収録があると言って出て行っただけりだった。私と桃子の二人で出迎えた。

「飯食ったか？」と聞いてきたので、二人で声を揃えて「うにやあ（まだ）」と答えた。すると、通じたのか、猫缶を開けて、テーブルの下に置いてくれた。沙汰もリビングのテーブルで何か食べると、ムスツとした顔のまま、ギターを取り出し、アンプに繋げないで、ジャカジャカと弾きだした。

「やっと、やる気になった様ね」

桃子が、猫缶を自分の元に引き寄せながら言う。

「途中で客が帰っちゃったから？」

私は、桃子の下にある猫缶を前足で手繰り寄せながら聞く。

「それもあると思うけど、お兄ちゃん、ベッドのお部屋にある紙見た？」

「何それ？」

「悔しいから貼っておくって、昨夜言ってたよ。お兄ちゃんが寝てた時、ずっと『チキシヨー』って叫んでたよ。何て書いてあるか教えてよ」

「わかった、行こう」

ベッドルームのドアは閉まっていた。私がジャンプしてドアのレバーハンドルを引き、ガチャと音がした瞬間に、桃子がドアを体で押した。沙汰は気付いていない。ドアは開き、ベッドルームへの侵入は成功した。

部屋に入り、大きなベッドに登ると、枕元にプリントされた紙が貼ってあった。以前見たことがない紙だったので、これだなと思って読んでみた。どうやら、インターネットの掲示板の画面をプリントアウトした物らしい。

辰則かわ¹

沙汰よりリズム感あって草生えるwww

今北産業

へビロクに

ぬこ様がメンバーに加わり

沙汰首になりそう

ぬこうP 沙汰ぬこに気を遣っていてワロタ

こいつジェラートとぬこに食わせてもらってんな

ヒモ二本になってて裏山 人生勝ち組

マジレスするとアマ並みのギターテクで昔のまぐれに縋ってただけ

声もぬこの方がかわE

沙汰ぬこのブリーダーやれば？ぬこだけでバンドできる

それはないわWWW 家夢はいるで

あいつ家借りられたんか？

マジレスすると沙汰が保証人になったららしいで

泥船やないかWWW

「お兄ちゃん早くう」

桃子にせがまれ、仕方なく丁寧に読んでやった。

「イマキタサンギョウ？」

「今来たところだから三行で説明して」

私は、昔の知識と憶測を組み合わせて説明する。

「ぬこってというのは猫の事。うPは画像提供してって事かな？草生えるとギザギザ記号は、笑えるの意味らしい。裏山は羨ましいの意味」

「お兄ちゃん、よく分からないけど。沙汰って、どうやら馬鹿にされているみたいね」
「そうだと思う、悔しかっただろうね」

隣のリビングからは、ギターのジャカジャカ音が深夜まで続いた。

次の日も、その次の日も、沙汰はスタジオに行くと言って出て行った。見送る際に、臭いを嗅ぐ振りをして沙汰の左手の指先を見ると、指にタコができて硬くなっているのが分かった。ギタリストはここが硬くなるのは分かっている。出会った頃は、タコなんてなかった。本当に練習しているらしい。

『ねこねこにゃんにゃん』です。きょうの猫ちゃんは、ヘビーロックの天才ギタリスト辰則君と、妹のフローレンスちゃんです。ゲストは、同じくヘビーロックのキーボード、源家夢さんです。拍手う」

かすみは、私と桃子を抱っこしてオープニングに入った。私達はすぐに床に降ろされたので、セットのこたつのテーブルの上に移動した。それにしても、この番組、同じ事務所の人間ばかりが出演しているが、大丈夫か？私が腹這いで寝そべり、ぼんやりとそんな事を考えていると、桃子が隣に寄って来て、二人で並んで寝そべる格好になった。

「あいつ、ダメ男に引掛かってザマあと思つてたけど、沙汰が真面目になつちやつてつまんない」

多少嫌味は入っているが、以前ほどかすみに対して嫌悪感を持っていないようだ。話している時の横顔が穏やかで、緊張感がない。

「そういえば、桃子がベビーベッドの頃、かすみに齧られていたな。ごめんな、もっと強く注意すればよかったな。まだ怒っているんだろう？」

「それだけじゃないよ。あいつ、私の上で何回か吐いたのよ。その汚れも落ちなかったし。お兄ちゃんが死んじゃった後、奥さんがわたしをリサイクルショップに売ろうとしたの。でもね、傷と汚れのせいで買い取ってもらえなかったの。仕方ないからって、粗大ごみに出されちゃった。そこで処分されて、桃の人生終わっちゃった」

私は、申し訳ない気持ちで感情が高まり、尻尾の震えを止めることができなかった。私が死んだことで、自分の周りの人生を狂わせてしまったことに、今更ながら気付かされた。

「ごめん」頭を桃子の体に擦り付ける。

「気にしないわよ。お兄ちゃんと奥さんには大事にしてもらってたし、あの女も悪気があつた訳じゃなくて、おバカだっただけ。仕方なかったのよ」

「じゃあ、桃子は幸子より早く死んじゃったんだね。幸子はその後、いい人生を送ったんだらうか？」私は感慨にふける。

「奥さん？いい人生かどうかは知らないけど、まだ生きてるよ」

「えっ？」

「もう、かなりのお年らしいけどね」

桃子のコミュ力にはいつも驚かされる。

「俺たちって、それ程遠い未来に生まれ変わった訳じゃなかったのか」

「よく分からないけど、お兄ちゃんの住んでいた埼玉の家にまだ住んでいるって、植物仲間からリレーで聞いた。ほら、あいつの墓の横に、赤い花植えてたじゃない？」

それを聞いて、無性に幸子に会いたくなつた。私の亡き後、面倒をかけただろうに。会って謝りたかった。そう考えている事に桃子は気づく。

「お兄ちゃん、猫一人で埼玉に行くのは大変よ」

「そうだな、お金もないし。ライブで埼玉に行くことはないかな？連れて行ってもらおう」
「家に帰ったら、調べてみようよ。埼玉に行った時に、こっそり抜け出せばいいよ」

マンションに連れて帰られ、キャリアケースから出されると、桃子と二人で部屋を探索することにした。リビングのテーブルの上に、沙汰のスケジュール帳が放置されているのを見つけた。沙汰は相変わらず、ギターの練習をしていた。私は、悪戯をする振りをして。前足をペロペロと舐めてから、スケジュール帳をめくってみる。沙汰は、ギターに集中していて気づかない。スケジュールを見ると、来月からライブの予定がぎっしりと詰まっていた。カレンダーに書かれていた渋谷、中野、高崎、などの地名の羅列を追っていくと、『埼玉やすらぎの森ホール』と、私の以前の自宅の近くの公園から、さほど離れていない地名が見えた。やった、でも縁起悪いな、私が前の人生を終えた公園の近くじゃないか。ただ、スケジュール帳を見る限り、チャンスはその一度きりしかないようだった。私は、桃子と作戦を打ち合わせることにした。桃子は、コンサートに連れて行ってもらえるとは限らないので、桃子と一緒に抜け出す案と、私一人でなんとか抜け出す案の二通り考えておくことにした。

「埼玉のライブ？あたし、食レポあるから無理。フロレンスだけ留守番は可哀相。ねえ、この子も辰則と一緒に連れて行ってあげて」

かすみは、上目遣いで沙汰に頼んでいた。相変わらずかすみは優しいな。これから、抜け出す作戦のことを思うと、私の尻尾は少し震えた。私達は、別々のキャリアケースに入り、ライブに向けて車は出発した。

運転は沙汰に任せ、ナゴミは携帯で、静かだが強い口調でどこかと交渉をしている。

「急にすみません。ピアノを手配してもらってもいいですか？ 使うつもりだったピアノ

に不具合があつて。ええ……。家夢さんのピアノソロがあるので……。いえ、曲順は変えるので大丈夫です。ピアノある？ 良かった。調律師がいない？ いえ、それは私が何とかしますから……」

電話を切ったナゴミは、後方を振り返り、後部座席で私の隣に座っている家夢に謝る。

「ごめんなさいね。家夢さんの曲順が変わるわね。それと、いつものピアノとちよつと感じが違うらしいから」

「いい、いいえ」

家夢の声は、オドオドしている。家夢は、キャリーケースの蓋を開け、細い指を伸ばしてきた。私を撫でたい様子なので、顔を出してやった。彼は小さな声で呟く。

「ナゴミさんってスゲエよな。仕事もできるし、トラブルにも冷静だし。この人に弱点なんてあるのか？ そんな彼女と仕事している沙汰さんもスゲエ。しかもジェラートさんが恋人でモテまくりじゃん。最強だ、カッケエ」

ぶつくさ私に話しかけないで、前の二人に言え。それに家夢よ。お前は二つ間違っている。一つは、お前はナゴミの本当の姿を知らん。もう一つは、沙汰なんぞはまだまだモテているとは言えん。本当にモテるとはこういうことか、だ。

「ピンポーン」

数日前の深夜、マンションのインターフォンが鳴った。かすみは、玄関先に行く前にモニターをチェックした。私は、キャットウォークから、モニターが見える位置まで移動する。沙汰は旅番組のゲスト出演で、今日は帰ってこないはずだが？ モニターにはナゴミが映っていた。

「ただいまあ、ジェラート。お家に入れて」

ウインクしながら、人差し指を何度もモニターに押し付けてくる。かなり酔っているようだ。かすみと私は玄関先まで迎えに行った。

「ちよつとナゴミさん！」

「なあに、えへへへ」

「飲んでるじゃない。もお、どうやってホールからここまで三重オートロックを抜けて、ドアの前まで来れたの？」

「えへへ、これ、沙汰さんに貰ってた」

ナゴミは、白いプラスチック片を、かすみの前にチラつかせた。まさか、沙汰はマンションのカードキーを名刺代わりに配っているのか？馬鹿だ、本物の馬鹿だ、あいつは。

私は立ち上がって、ナゴミのカードキーをはたき落そうとしたが、徒労に終わった。

「ねえジェラート、少し飲みましょうよ」

普段の黒髪をなびかせシヤキツと仕事をするナゴミは、完全に崩れ去り、ただの酔っ払いと化していた。かすみ、関わるな、寝かせとけ。だが、人の好いかすみは「少しだけですよ」とナゴミをリビングへと招き入れた。

「2020年物だけど、これでいい？」

「お、悪いわねえ、乾杯」

私はかすみの膝の上へ移動した。桃子は、キャットタワーの上から、私達を見下している。

「で、何かあったんですか？」かすみは、何かを察したようだ。

「ちよっと切ないことがあってね」

一口ワインを飲んで、ナゴミは下を向く。

「KSKけーすけって知っていますでしょ？」

「同じ事務所ですから」

ああ、今売り出し中の、アイドルの男の子か、かすみが何か言ってたな。

「その子と飲みに行ったのよ。『二十歳のお祝いに、お姉さんがご馳走してあげる』って」

「まさか、またいつもの酒癖発揮しちゃったの？ヤダー」

かすみは呆れている。

「ち、違うわよ。私、酔ってなかったわよ。ボトル一本で酔う訳ないでしょ？ほら、あの子、カッコいいじゃない？前から、いいなと思ってたのよねえ」

「ええ？ナゴミさんが？まさか、あの子を口説いてたの？バーか何処かで？」

「個室で飲んでたからさあ。今度は写真に撮られる心配もないと思って……」

「何したの？ヤダー！」

かすみは、酔っていないのに顔が赤い。

「いや、ちよっとキスなんかをね。チュッチュツとしてたら『や、やめて下さい』なんて言われてね。男なんだから覚悟決めなさいなんて思ったワケ」

「まあ、デートで個室で飲んでたら、それ位はありますよね。でも、ケースとはかなり歳離れているでしょ？ナゴミさん三十七でしたよね？」

「今月はまだ三十六！」変に強調する。

「ケースケからしたら、ナゴミさんは恋愛対象にならないんじゃない？」

「そんな事ないって！『僕、ナゴミさんに憧れているんです。いつか僕にも曲書いてください』なんて言うのよ？ 絶対年上好きだと思っじゃない？」

ナゴミよ、それはビジネス上での感情ではないのか？ かすみも、同意しかねて首を傾げている。

「で、もうここまで来て引く訳にはいかないじゃない？ 周りに人はいないし。ちょっと強引に彼の上に乗っかっちゃったの。そしたら、あの子涙目で『お母さん』って」

「そこで冷めた？」

かすみは前のめりで尋ねる。可哀想に、そのケースケとやらは、襲われてパニックだったんだろう。ナゴミは私を掴んで、自分の胸元に抱える。おお？ 結構あるな。

「いや、冷めたってのもあるんだけど、私、あの子から見たらお母さん位の歳なんだなって。そう思ったら、私、自分の息子位の子に何やってんだろうって」

ナゴミよ、『お母さん』はそういう意味ではないと思うぞ。かすみは、私を取り戻して自分の膝に置き直す。

「そう言えば、私とは逆だけど、ジェラートと沙汰さんもかなり歳の差あるわよね？ きっかけは？ 仕事で一緒だったから？」

「仕事で一緒だったけど、男として見たことはなかったよ。ナゴミさんも私がやらかした『カメラマンビンタ事件』知っているでしょう？」

「ああ、あなたが、きわどい水着を着せようとしたグラビアカメラマンを叩いたやつでしょ？ あれで却って人気出たわよね」

「事務所の確認不足だったらしいけど、あの時、現場から一旦事務所に戻っていたマネージャーに電話入れたら、マネージャーと一緒になぜか沙汰が現場に来たの」

「どうして？」

「沙汰は『理由はともかく、殴ったのは駄目だ。俺、あいつと仕事したことあって顔見知りだから、ついて行ってやる。一緒に謝りに行くぞ』って、手を引っ張って一緒にカメラマンに頭下げてくれたのよ。私は渋々下げたけど」

「へえ、沙汰さんがね。あの人、面倒見いいわよね。家夢さんなんて神様扱いしてるよ」

ナゴミは私を引き寄せようと足を掴む、かすみは私の胸を抱えてそれを阻止している。

「その後も、なぜか事務所の社長に直談判して『バラエティで売り出そう』としている子に、

変な仕事やらせるな』って言ってくれて。まあ、事務所とカメラマンとの打ち合わせが足りなかっただけなんだけど」

「そこまでしてくれたんだ。それで付き合うように？ 初めからオープンに付き合ってるわよね」

「私、隠さないから。事務所も公認だし」

「同棲も早くなかった？」

「いや、それは訳があつて……。ほら『ゴンドワナ』が捕まってたじゃない？」

「ああ、あのミュージシャン。大麻だっけ？」

「覚せい剤だったと思うけど。あのニュース見て。沙汰なんて言つたと思う？ 『ロックはクスリで捕まつてこそ一人前だ。カッケエ』って。いつの時代の話しているのか呆れたわ」

「沙汰さん、子供みたいな所あるからね。悪いけど」

「で、アタシ思つたワケ。沙汰売れてきてたから、そのうち薬に手を出すんじゃないかって。それで、一緒に住んで、薬やらないように見張ろうって」

「でも、その後、売れなくなつて、薬買えなかつた訳だ」

「ナゴミさんも、沙汰を注意して見ててよ」

かすみ、お前はそんな理由で奴と同棲していたのか？ 私は呆れて、かすみの膝から立ち上がった。そこへナゴミの手が伸びる。

「ちよつとお、さつきから辰則盗ろうとしてませんか？ 駄目ですよ」

かすみに取り返されてしまう。

「今日位いいじゃない？ ねえ辰則君。可哀想なお姉さんを慰めて」

二人に引つ張られている。前世でこんなにもテた事があつただろうか？ 猫って得な生き物だな、はっ！

ふと斜め上を見ると、キャットタワーの上で桃子がうつ伏せになつてこちらを眺めていた。前足を体の内側に畳み、その上に顔を乗せる『香箱座り』^{こうばこ}という形だ。これはリラックスしている証拠の筈。リラックスはしているようだが、半開きの目は、私を軽蔑しているようだった。

「お兄ちゃん。何？ 二人の女の間でデレデレして。奥さんに会つた時に言うよ」

「お、おい、違うって。俺の意思じゃないって」

私は慌てて二人の手から抜け出し、キャットタワーを上る。桃子のすぐ下まで行き。桃子の機嫌を取ろうとした」

「知らない」

「幸子に言うなよ」

まさか、幸子に喋ったりはできないだろうが、こいつ変なネットワークとコミユカあるからな。回りまわって、オウムにでも喋られたら大変だ。

「私達も、フローレンスには適わないね」

「あの兄弟は、家に来てからも仲いいの」

かすみたちが笑う。いや、私は困っているんだが。

キャットタワーから、女二人を見下ろしてふと思った。

「なあ桃子。俺が生まれ変わったこの世界って、沙汰やかすみにしても、しっかりものに見えるナゴミにしても、ちよっとおバカさんが集まっていないか？」

桃子はふうっと溜息をつく。

「お兄ちゃんが一番馬鹿よ」

「いや、あれは二人が俺を……」

「そこじゃない。愛する奥さんや、可愛い私を残して死んじゃうんだから。二人がどれだけ悲しむか、分からなかったの？」

そう言われて、私は胸が痛み、遠くの方に目を向けた。埼玉はあっちの方だろうか？

ふと現実に戻ると、コンサート会場の『埼玉やすらぎの森ホール』が近づいたようで、キャリーケースの蓋は閉じられた。前世では、音楽にあまり興味がなかったので、ここに来たのも初めてだった。リハーサルで分かったことだが、ここは、小さなイベントホールで舞台のすぐ裏に、控えのために会議室がある。私と桃子は、そこで出番まで待機するこ
とになった。

舞台と控室の距離が近いせいか、観客たちの声援が、以前よりも大きく感じられた。沙汰が「埼玉最高だぜ」とシャウトした後、キャーっと響く声の海。かなり盛り上がっているようだ。それも、私が出演予定の新曲に入ると、観客の声は鳴りを潜めた。今回も、大きな音に弱い猫に配慮してくれているようだ。すぐにナゴミが会議室に入ってきて、私だけを抱き上げた。

私は、これまで何度もそうしてきた様に、静けさの中、十数度ギターの弦を弾き、再びナゴミに連れられて控えの会議室に戻った。

「お疲れ様。お兄ちゃんの弾いているところ、見たかったな」

桃子は芳う。私の出演が終わっても、ライブの歓声は衰えていなかった。沙汰のトークが始まり

「俺も、辰に負けてらんねえっすよ」の直後に拍手が響いているのが伝わる。よかった。私の役目は終わったようだ。これで、沙汰とかすみも大丈夫だ。お幸せに。

ライブが終わり、私達は、行きと同じく別々のキャリーケースで車の後部座席に乗せられた。運転席の沙汰は上機嫌な声だった。

「今日は、俺のファンも沢山いたぞ」

「良かったわね。沙汰さんの努力が実になってきたのよ」
助手席でナゴミもそれに合わせる。

後部座席の私達の隣には、家夢がいて「辰則君、フロールレンスちゃん。今日もお疲れ様」と言いながら、私と桃子のキャリーケースの天板を、どちらも開けて、上から指を差し入れる。私と桃子の頭を交互に撫でていた。この人は根暗で友達がいないのであろうか、猫に対しては優しく、その扱いは丁寧で、撫でられているとうっとりする。決意が鈍りそう
だ。

車がコンサートホールを出発してすぐに、桃子が「お兄ちゃん、いい？」と確認を求めた。ホールから出て数分で、昔の自宅の近くに着くはずだ。

「いいよ。もう少し走ったら、近いと思う」

私は、家夢に甘えた振りをしてキャリーケースの開いた天板から頭を出し、彼の手にじやれる振りをして、周囲の風景を確認した。次の信号を過ぎたら、すぐ家だったはず。運よく、その信号が赤になった。私は、天板を押しつけて家夢の胸に乗った。彼は私を抱きとめて、思いがけないじゃれつきに、その幸薄そうな細い顔に笑みを浮かべた。彼は、体を隣のキャリーケースの方に向け、後部座席のドアに背をもたせる格好となった。幸い、ドアにロックはかかっていなかった。

「桃子、今だ！」

私が鳴くと、桃子もキャリーケースから飛び出してきた。桃子も家夢の胸に飛び込み、彼の両手が私で塞がっているのを見て、彼の左脇に前足を突っ込んだ。ガチャリと音がした。打ち合わせ通り、後部座席のレバーを引いたみたいだ。

「うわっ！」

ドアが開き、家夢は、後ろ向きに道路に落ちた。

「どうした？」

「沙汰さん、車止めて！後ろのドアが開いた！」

私も、家夢と一緒に車から投げ出されながらも、前方の二人がパニックになっているのが分かった。

家夢は、私を守るように、しっかりと抱きかかえたまま道路に落ちていた。沙汰、いいメンバーじゃないか。心苦しくなりながらも、覚悟を決めて、私は家夢の手を噛む。

「痛い」と彼が私を抱っこした手を緩めたところで、彼の胸から飛び出した。桃子も後から車外に出た。

「行くよ！桃子、ついておいで！」

私は全力で走り出した。風景は以前と変わっていたが、路地に入ると『池谷医院』の看板が見えた。以前見た時よりも、看板は錆びてボロボロになっていたが、文字は読めた。振り返ると桃子に「ここを左だよ」と言い残し、先を急いだ。捕まらないようにというよりは、一刻も早く幸子に会いたかった。猫は長距離走に向いてないからだろうか、すぐに息切れをおこした。それでも、ヨロヨロと歩いて道路を横断すると、生け垣に囲まれた青い屋根の家が目に入った。我が家だ！

息を整えて、生け垣の隙間から体を入れて、庭に入り込んだ。かすみの墓はあるだろうか？庭を探索することにした。縁側のサッシから離れていない場所に埋めたはずだが、確か石を乗せたはずだが。正確にはお墓の場所は、はっきりしなかった。ただ、お墓と思しき場所の周囲には、赤い花が一面に咲いていた。確かゼラニウム。花屋の勧めで植えたゼラニウム。「君がいて幸せ」この花言葉を噛みしめる。以前も今も幸せだよ、かすみ。本当にこの五枚の花弁をもつ花が、私が植えたゼラニウムかどうかは分からないが、この花達がかすみを守ってくれていた。そう思うだけで、心が温かくなった。

私は、玄関へ回ってみた。幸子が家にいるかもしれないと思った。大きな木製のドアが目に入った。その瞬間、ドアがガチャリと開き、そこから中年女性が出てきた。ふくよかな女性、だが幸子ではなかった。まさか娘？でも彼女に娘が生まれる筈がないのだ。もしや、ここは私が生まれ変わった未来ではなく、並行世界っていうものなのか？私は、混乱したが、兎に角幸子を探そうと決意した。玄関から出てきた中年女性が、ドアの隙間から、家の中に向かってお辞儀をしていた。その時に私は、女性の足元に近づき「ニャーゴ」と

大きめの声で鳴いてみた。

「あらあら、可愛い猫ちゃん、毛がフワフワね」

女性は私の頭を撫でる。

「森須さあん。大きな猫ちゃんがお庭に来ましたよ」と、閉めかけたドアを再び開けて、家の中へと声をかけた。

「あ、あら、猫ですってえ？」

玄関から外に、ヨロヨロとした足取りで老婆が出てきた。髪は短くなり、顔は以前よりふくよかになったが、昔の面影は残っていた、幸子に間違いない。幸子、お義母さんに似てきたな。私は、幸子に近づき、彼女の下腿に私の腰を擦り付けた。かすみも、以前私や幸子に、こうして愛情表現をしてくれていたから伝わるはずだ。更に尻尾を伸ばして、幸子の足に絡めてみた。

「おやおや。この猫ちゃん人懐こいわね」

「そうですね、私にも平気で近づいてきたし。おや、首輪がありますよ」

中年女性が、フサフサの私の首に埋もれた首輪を発見した。

「青い首輪ね、男の子かしら？迷い猫かもね」

「外飼いの子かもしれませんよ」

二人は私の前後に立って、どうしたものかと話し合っている。

「ヘルパーさんは、猫飼った事あるの？」

「私、去年亡くしちゃったんですよ。だから寂しくてえ……。森須さんは昔飼ってたんですよね？」

幸子は、頷きながら私の方を見て、背中を撫でる。

「そうよ。この子みたいに大きくて長毛の猫ちゃんだったわ。ずーっと昔にね、主人と二人で甘やかしてたのよお。猫も甘えちゃって、どこにでもついてきたものよ。猫が死んじゃって、その後に主人も、亡くなったの」

老婆の手は優しく私を撫で続けた。かすみが死んだのはともかく、妻を未亡人にしたのは私の責任だった。そう思うと、居たたまれなくなる。感情を抑えきれず、尻尾がピンと立つ。

「でもね、猫ちゃんは最後まできちんと主人に看取られていたみたい。私は病気で実家に帰ってたんだけど。猫ちゃんは、主人にとっても大事にされていたんだなって、つくづく思うの。主人は、猫と私のために一生懸命働いてくれた。昼間も夜勤もこなしてたのよ。」

ほら、向こうに工場の跡地があるでしょ？あそこで、工場長してたのよお。家族と従業員のために必死で働いてたのよ。おかげで、何不自由ない生活させてもらって、おうちも建ててもらった。でも、そんなに一生懸命働かなくてもいいから、もつと長生きしてほしいから「たわ」

「働き過ぎで、体を壊されたんですね？」

何も事情を知らないヘルパーが相槌を打っている。

「俺が悪かった」と謝りたいが、どうせ伝わらない。気持ちが高ぶっても涙は出ない。代わりに、立てた尻尾が激しく震えていた。私は高まる感情の中で、自分の次に為すべき事を見つけたような気がした。ここに残ろう！残って数十年分の埋め合わせをさせてもらおう。そう心に決めた。沙汰が立ち直り、かすみは幸せになれるだろう。桃子もかすみ達に大切にされている。もう、あのマンションで私が居る意味はない。代わりに、此処で幸子と余生を共にし、慰めとなってやろう。そう考えて幸子の方を見上げると、彼女は優しい声で、でも目は厳しく諭す様に、首を横に振りながら言った。

「駄目よ」彼女は首輪に触れる。「あなたには、待っている人がいるでしょう？こんなに毛並がよくて、体つきもふつくらしている。あなたが大切にされているのが分かるのよ。何があったかは知らないけれど、その人達の側に居てあげて頂戴。側に居て、目を合わせて、声をかける。噛みついたって、引っ搔いたっていい。あなたの温もりを、あなたの優しさを、大切な人に感じさせてあげなさい。わかるわね？」

私は、小さく「グル」と鳴く。

「お婆ちゃんね。昔に猫ちゃんと旦那様を亡くしたけれど、いい思い出がたーくさんあるのよ。この家に居るとね、あなたみたいな人懐こい猫、優しい旦那様の事がよく浮かぶのよ。それだけでいつも胸が一杯になるの。今はお友達もいるし、こうやってヘルパーさんも来てくれる。だから、何も心配してくれなくてもいいのよ。優しい猫ちゃん」

幸子は、意識に上っているかどうかは別として、私が何を考えていたか分かっている、そんな気がした。私は、今一度、体と尻尾を彼女に擦り付け「元氣そうで安心したよ」と言った。きつと気持ちだけでも伝わったろう。そして、玄関のドアの前から踵を返して立ち去った。

幸子の言う通り、かすみ達の元へ帰ろうと決意した。まず、ついて来た筈の桃子を探さ

なければ。昔の我が家の生け垣の根っ子付近の臭いを嗅いでみたが、犬ほど嗅覚がないので、よく分からない。生垣からそつと首を出し、左右をキョロキョロと見渡した。家の前の路上のどこからか「お兄ちゃん」と声が聞こえた。そつちの方向を見ると、猫らしき動物が、人間に抱っこされていた。恐らく沙汰か家夢だろう。私は「今そつちに行く！」と言つて道路に飛び出した。次の瞬間、大きなエンジン音と共に、巨大な黒いタイヤが横から突っ込んでくるのが目に入った。私は体がすくんで動けなかった。後には、かすかに「お兄ちゃん」と悲しげな声だけが耳に残った。

(第三部)

「桃お」

「先生、森須さんに発語がありました。目の焦点も合っているみたいですし、意識レベルがかなり改善しているようです」

横で揺さぶられて、私は気がついた。私は長椅子に座っていた。そこは、狭い部屋の様だ。白い鉄の様な壁に囲まれ、丸い窓が複数あり、それぞれの窓にガラスが嵌め込まれていた。どこだろう、ここは？何かで見た事ある風景、そうだ何かの映画で見た。ここは恐らく潜水艦の中だ。そう思うと納得した。

「先生、どうします？いったん治療を中止しますか？」

隣を見ると、白衣を着た看護師らしき女性が室内のマイクに向かって喋っている。

「いや、悪い事ではないので治療そのまま続けます。森須さん。今からその部屋では気圧が高くなります。耳が押される様な感じになります。問題ありませんので、頑張りましょう」

室内のスピーカーから声がした。

「ここはどこか分かりますか？」と看護師が聞くので

「潜水艦みたいな窓ですね」と答えた。

彼女はくすつと笑う。

「口を閉じて、鼻をつまんで耳に空気を送り込むようにすると、耳が痛くないですよ」と鼻をつまむしぐさをした。

私は耳が痛くなってきたので、彼女の真似を試みたが、どうもうまくできなかった。

鼓膜がへこんだ嫌な感じをやり過ごし、部屋の右側にある扉を看護師が開けてくれた。私は、看護師に支えられながらゆっくりとそこを出たが、扉を開けた先も海ではなかった。鉄の部屋の外は、無機質な白い壁に囲まれた大きな部屋だった。目の前に、白衣の男性が立っていた。

「森須さんわかりますか？ご自分の名前を言ってみてください」

「森須寅太郎です」

「ここがどこか、わかりますか？」

「わかりません。病院か、実験室の様に見えますが」

「ここは病院ですよ。意識がはっきりしてきたようで良かったですね、さあ座ってください」

看護師に促されて、車椅子に乗せられた。彼女にそれを押ししてもらいながら、隣に歩く医師から話しかけられた。

「本当に良かった。森須さん。この病院に運ばれてから、ずっと目はぼんやりと開いているのですが、意識の状態が今一つで、何もお話にならない状態だったんですよ」

私は、自分の手を見た。毛に覆われた前足と肉球ではなく、皺の刻み込まれた掌がそこにあった。

「私は、車の中にいる所を発見されたんですか？」

「そうですね。森須さんは、重い一酸化炭素中毒でした。さっきの潜水艦みたいな所は、高気圧酸素療法室といって、体に高圧の酸素を送る治療のための部屋です。そこで一日一回治療していたんですよ。あんな大型の部屋があるのはこの地域ではうちだけです。普通は一人用の、狭いカプセルなんですから。かなり良くなってきたのもう少し、この治療を続けますね」

「はあ」

「さあ、お部屋に着きましたよ。森須さんの奥さん！ご主人の意識がはっきりしてきましたよ！」

病室と思しき場所に着く。医師が話しかけた先には、ベッドの横の椅子に腰かける女性がいた。幸子だった。老婆ではなく、まだ若い妻だった。

「あなた、わかるの？ごめんなさい、私……」

彼女の目に涙が溜まっている。私は首を振る。

「あなたが大変な時だったなんて知らなくて。工場の方から色々聞いたの。辛かったです」

よう。私、自分のことばかりで……」

「いい、いや。元気そうで何より」

私は、まだ現実を受け入れられないで、とんちんかんな返事をした。さつき、未来の妻とあったばかりだという意識から抜けきれない。今の私は人間の様だが、猫だったのは夢だったのか？さつきまでギターを弾いていたよな？ライブ後の、出待ちの客からの「タツノリー！」という歓声。沙汰が私をバシバシと叩くように撫でる荒っぽい友情、抱きしめてくれるかすみの胸の感触、桃子が私の毛繕いをしてくれた時の舌のザラザラ感、リアルだったよな？あれは全て虚構だったのか？それとも、また生まれ変わったのか？時代を遡って？

混乱しながらも、この場をどうにか言い繕わなければならないような気はしていた。

「ごめん。迷惑かけてしまって。大変だったろう。確実に死ねたのならまだしも、生き恥をさらしてしまったな」

私は下を向き、呟くように言う。

「そんな事、言わないでちょうだい！あなたが助かって、私どんなに嬉しかったか……」
この世界を受け入れられず、更に気まずさも手伝って、私は黙り込んでしまった。その場にいた医師や看護師も気まずそうだ。

「明日も、高気圧酸素療法やりますね。それと、当院の精神科の受診予約も入れておきますね。森須さん、相当メンタル崩されていたみたいなので、お話聞いてもらってください」

医師はそう言うと、足早に看護師と共に、病室から出て行った。

「うーん、狼化妄想症という『自分が狼だ』と信じ込む患者の例はあるけれど、世界的に稀な病気だしなあ。猫で、ライブでギターを弾いていたって？いや、多分、練炭焚いたとき飲んだ睡眠導入剤の影響か、一酸化炭素中毒で脳に影響を受けたせいじゃないかな？」
精神科の先生に、笑いを必死で噛み殺した顔で言われて、私はこれ以上争う気分になれなかった。どうせ信じてもらえないし、これ以上「あれは、妄想なんかじゃない」と言い張ると、別の病名をつけられそうだった。それに、精神科の医者言うことが尤もな気もしてきた。さつきの先生には、一部しか話してないけど、相当ウケていたな。後ろにいた看護師も、笑いを堪えるために顔を背けていたしな。

そんな事を考えながら、歩いて病室に戻ると、妻の他に、工場長の寒川と、産業医の宇

似先生が待っていた。

「無事でしたか？心配したよ。森須さんが無断欠勤するもんだから。いやね、森須さんが休んだ日、宇似先生がたまたま工場にやって来る日だったんだよ。先生が『森須さんが無断欠勤？最近顔色悪くて体調崩されているかもしれないので、自宅が近いなら様子を見に行きましょう』なんて言うもんだからさ。先生と家に行ってみたんだよ。そしたら、居ないし。鍵は開いているし、部屋はゴミだらけだし。しようがないから、警察に来てもらって、奥さんにも連絡とって、あちこち探して大変だったんだよ。で、その後奥さんから連絡あって、公園の車内で倒れているっていうじゃないか。心配かけないでよ」工場長は苦々しい顔で言う。

「すみません」

この雰囲気には、私は猫に戻りたくなる。

「気になさらないでください。森須様に万一の事があったら、ご家族も私達も悲しむところでした」

宇似先生は、工場長の隣で控えめに言う。

「車の窓が少し開いていたのが幸運だったのかもしれないね。煙が車内に籠らずに漏れていたようですよ」

「開いていました？」

「ええ、病院のスタッフからはそう聞いています」

「あなた、あの夜、宇似先生と工場長が病院に駆けつけて下さったのよ」

妻は、横から口を挟む。

「すみません」

私は工場長と先生に頭を下げる。

あれ？窓閉め忘れたっけ？薬で意識が朦朧としてたからなあ。そう自分に言い聞かせた。

数日後、退院となった。担当医からは「一酸化炭素中毒の方は、記憶の障害が多少残っているみたいですが、日常生活には問題ないでしょう。こちらに関しては治療終了です。精神科への外来通院はしばらく続けてください。精神科のドクターが、森須さんのお話を聞きたがっています」と言われた。

私と妻は病院の玄関を出て、バスを待つ事にした。二人でそれぞれ荷物を一つずつ抱え、

病院の玄関先にあるバス停のベンチに腰かけていた。日差しが強くなり、ポカポカと暖かかった。

「あ、そうそう。かすみのお墓ありがとう。私がない間に死んじゃってただね」
幸子が、少し寂しそうな笑顔を作る。

「いや、別に。近くに種植えておいたから、そのうち咲くと思う。来年になるかもしれないけど」

「ありがとう。天国のかすみもきっと喜ぶわよ」

私は切なくなつた。私の中では、二度もかすみと別れていた。例え夢であっても、かすみと過ごした時間、それが宝物であっただけに、失うと余計に辛かった。

「そうそう、車の中にこれが落ちてたんだけど？」

幸子が鞆の中から取り出したのは、猫用の青い首輪だった。

「かすみには、首輪着けたことなかったわよね。かすみへのプレゼントだったら、お墓に埋めていただろうし」

私はドキリとした。

「さあ？でもいいデザインだね」

青い革製の首輪、真ん中には小さな石がついていて、それが太陽の下でキラキラと光っていた。これは確かに私の物だ。かすみからのプレゼントだった。

私は、過去に戻ったのか、前とは似ているが違う世界に来てしまったのかは分からないが、かすみに飼ってもらっていた事だけは確信できた。ああ、かすみにもう一度会いたい。人間でも猫でもいい。ちよつと位問題児でも構わない。少しでも声をかけたい、かけられたい。あの温もりに触れたい。そう考えると、目に涙が溜まってきた。

「かすみの事、思い出させちゃったかしら？ごめんね」

「い、いや。この首輪カッコイイね。頂戴」

そう言って、私は首輪を、手首にパチンと装着してみた。

「手首につけたの？猫用よ」

「ちよつといいなと思って」

「また、いつか猫飼いましようよ。その子に着ければいいじゃない」

「そうだな。それもいいな」

ダメ！この首輪は、かすみが働いた金で買ってくれたものだから、誰にもあげない。新しい猫には、私が別に買ってやるから。

沙汰、かすみの事頼んだよ。家夢さん、ナゴミさん、沙汰をヨロシク。桃子、色々ありがとう。俺、優しくしてしっかり者の妹に出会えて良かった。あれ？こつちの世界での桃子は？

「お、おい。ベビーベッドの桃ちゃんどうした？」

私は、妻の肩を掴む。

「え？どうしたの？あれはまだ家にあるけど、もう必要ないから、リサイクルショップに売るか、売れなかったらもったいないけど……」

「駄目だ！」

私は、妻の肩を揺すってしまった。

「ど、どうしたの？私、あれを見ると赤ちゃんの事を思い出して辛いんだけど」

私は強引な言い訳を口にする。

「かすみが死ぬ前までお世話になってたんだ。かすみの歯形が残っているんだ。かすみの思い出が残っているんだ。それに、次の猫のベッドにもなるだろ？目障りなら、俺の部屋に置けばいい。捨てるのだけは絶対駄目だ！」

「わかったわよ。そうね、私の赤ちゃんの代わりに、猫ちゃんに使ってもらえるなら、いいかも知れないわね」

私の迫力に気圧されたのか、幸子は渋々同意した。

バスが、角を曲がってやって来るのが見えた。私達は立ち上がって迎えた。かすみ、私はこつちで幸子と生きていくよ。桃子、帰ったら、真っ先に拭いてキレイにしてやるからな。そう考えながら、バスの運転席に向かって手を振った。